

# 音楽と私



東京コーモド室内アンサンブル 根本節子

この原稿を書くことになって、音楽との出会いを振り返ってみますと、私はたくさんの素晴らしい先生方に囲まれて、贅沢な時間を過ごしたものと、少々感慨深い思いに駆られます。最もこうした環境の中にいたからこそ、自分の音楽力のなさを思い知ることができたのだと思います。演奏に何かキラリと光るものがある訳でもなく、そもそも人前で何かをするのは苦手で、舞台上立って私の音楽を聴いてもらうなどはとんでもないことです。音楽を生業にできるはずがありません。ただし、この経験は音楽から離れた間も私の中で息づいていて、のちに音楽と再度向き合ったときの私の音楽生活を豊かなものとする糧となったと思います。これだけは母に感謝です。

さて大学進学にあたっては、反抗心全開で、両親がそれぞれに思っていた職業を全て排除し、東京都立大学理学部生物学科に行きました。

この学問も私に本当にあったのかわかりませんが、顕微鏡を覗いて卵細胞の発生過程を観察するのは性に合っていました。また何よりも相手次第、予想と違う結果が出て生き物が示す事実を受け入れて何故かを考える、テーマの変更さえも面白く、私の人生感まで変わりました。「こうあるべきである」と真っ直ぐだった私が、「相手任せのなんでもありで答えはない」を基準として物事や人を見る様になりました。

そうはいっても、反抗心は健在ですので、おかしいと思えば「変だ」と付度なしにいう人間であることに変わりはありません。

大学に入学したら絶対に入ろうと思っていたのが学生オケです。オーデションがあると思い、恐る恐る部室に行くと、「楽器持っている?」「はい」で即入団、「経験者」として相当にちやほやされ、コンマスを2年間やったり大学祭でソロを弾かされたりしました。弦楽器の新入生は全く楽器を触ったことのない「初心者」がほとんどですが、全員が夏合宿を経て10月の大学祭の舞台に乗ります。それには呑気に教則本通りなどやってられません。子供の頃のヴァイオリンの先生にドフライン(Doflein)の教則本を教えてもらいそれを活用しました。左手指の形が図示されていて、すべての弦(最初の音の調)でその型で弾きます。そこへリズムを入れて右手のボーイングを加え、続いて子守唄やダンスをduoで弾きます。型が保てる限り移弦もします。自画自賛ですが、みなさんの上達は早かったように思います。

そして、私自身もこうしたことを通して、一歩前を出て自分を出すことの大切さを学びました。

その後は大学紛争の只中で東京教育大大学院に行き研究者の道を進むことにしました。結婚妊娠と続き、修士課程で終了し学位を取ることが課題として残りました。就職先が文系の大学の助手だったので、なかなか自分の研究はできず、その間子育てもあり「学位を取る」までヴァイオリンは封印しました。博士号はなんとか20世紀中の1999年に取得することができました。

さあ、晴れて音楽解禁です。インターネットでアマオケを探しましたが、父の介護もあり、なかなか条件にあったオケが見つからなかったところへ、都立大オケのOBの方(私より10歳以上若い)から都内で活動できる新しいオケを立ち上げるから参加しないかと声をかけていただき、参加することにしました。

指揮はそのみなさんが学生時代に指導をお願いした縁のあるチェコに拠点をおいて活躍されている武藤英明さんです。その音楽は端正でスッキリして驚くほど心地よく私の心にスッと浸透してきました。30年の封印を解いた私が最初に出会ったのが武藤さんとは幸運としか言いようがありません。ここでも、コンサートマスターをやらせていただきました。

そして2016年からは、高校時代の同級生が私のことを覚えていて誘ってくださったこの東京コーモド室内アンサンブルに参加しています。コンマスを仰せつかり、拙い演奏ですがソロを弾かせていただくこともあります。澤田先生のご指導のもと、これまでの経験を生かしてちょっとしたコツをみなさんにお伝えしながら、合奏を楽しんでいます。

個性がありつつ穏やかでゆったりしたみなさんとともに演奏する時間は至福の時です。

これからも、レッスンに通い、少しでもいい演奏ができる様精進していきたいと思います。

コロナ禍の中、ささやかな合奏の楽しみがままならなくなってしまいました。私たちはどれほどに音楽に救われ癒され力を得ていたか、日々考えさせられます。音楽家の皆様がその音楽を私達に伸びやかに届けてくださる日が、そして私たちがみんな安心して音を合わせ、アフターも楽しめることができる日が、1日も早く来ますよう願ってやみません。